とある上流階級の子どもたち

k o d o m o z u r u m u k e

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
とある上流階級の子どもたち

【Ｎコード】
Ｎ３２４０ＣＨ

【作者名】
ｋｏｄｏｍｏｚｕｒｕｍｕｋｅ

【あらすじ】
とある上流階級という身分にある子どもたちの秘められた話を描きます。勿論完全フィクションで実在の人物とは一切関係がなく、また冒涜ではありません。ここに書かれている内容が実在している家庭は恐らくないはずです。

プロローグ

彩子はこの春に大学へ入学した1年生。とある上流階級家庭の次女である。兄弟は姉が一人、弟が二人。子どもの頃から特殊な環境で育ってきた。どこへ行くにも少し離れて護衛がついている。世間からすれば優雅な暮らしであるが、反面不自由さもある。家に戻っても両親の他に様々な教育係がおり、世間一般とは比べものにならないほど厳しい躾と作法を受けてきた。この一族の名前を知らないものは日本全国どこにもいないだろう。

今日は学科が主催する宿泊実習である。朝早く、バスに乗って目的地へと移動し、テント作りから食料確保、薪割りなど自分たちで行った。一日動いてクタクタではあったが、開放的な環境で初めての体験をしたことから、皆興奮が冷めやらない状態だった。テントの中には同じ学科の女子生徒6名。勿論、学友として選ばれた良い家のお嬢様ばかりだ。寝るときばかりは護衛もいないし、自由な時間である。彩子は四人兄弟の真ん中ということもあってか、比較的活発で自己主張の強い少女である。このようなキャンプではリーダーシップを発揮することも多い。まだ寝付けない少女たちは、彩子を囲んで枕トークを始めることにした。こういった場ではどうしても下ネタや恋バナが多くなるようである。まずはそれぞれ男性観を話した後、過去の恋人に話はうつった。さすが高貴なお嬢様とあって、恋愛経験がある人がほとんどである。しかしそういった家ではあまり彼氏との付き合いが良く見られないことも多い。彼女たちも親には内緒でつきあっていたり、見つかって別れさせられたり、なかなか苦労が多いようである。常に護衛付きの彩子にはそんな体験があるわけもない。羨ましいと思いながら聞き入っていた。

一通り恋バナが終わると、更に話は下ネタへと入っていく。下ネタといっても高貴なお嬢様たちのものであるから、下品ではない。言葉と内容を選びながら、話は進んでいく。彩子は今日、自分たちのすごい秘密をさらけ出すことになる。

みんなは経験ある？

彩子は静かに語り出した。「ねえ、いきなりすごい話になるけど、まあ暗闇で顔もよく見えないからいいよね」「みんなって・・・あの・・・自慰行為、つまり、マスターベーションってやつ？やったことある？」

突然のことに顔を見合わせる他の５人。彩子は続けた。「私はね、それはとてもはしたない行為だから絶対やってはいけないとお母様に厳しく言われてるのよ」「しかもできないように予防されていてね」一瞬の沈黙の後、A子が「予防って何をするの？」と聞いた。続けて「正直言うと、私はやってるわよ。初めてやったのは高校2年生の時かな。たまたま股に手が触れたら気持ちよくてね。それから月に1回か2回はするようになったね」と告白した。

彩子は「みんな、絶対誰にも言わないって約束してくれる？このこと話したことがわかったら私、ただじゃすまないから」「でもこういうことって誰にも話せないと辛いものね。こういう会話したことないから。みんなだったら話してもいいかなって今日思ったの」と続けた。

それを聞いていたB子は「彩子もA子もぶっちゃけってくれただんだから私たちも話そうか。そして彩子の話をちゃんと聞かない？」と話した。顔を見合わせた６人の少女たちは全員がうなづいた。

彩子を除く5人のうち、自慰行為を体験したことがあるのはA子・B子・E子の3人だった。C子とD子は行為そのものは知っているが、自分でやったことはないという。親に見つかったことはあるかという質問に対し、E子はお母さんに1度、目撃されてしまったことがあるといった。そのときは「何やってるのよ。ばい菌が入ったら大変だからやめなさい」と軽く怒られたという。それからはトイレや風呂などだけでやるようにしているといった。見つかったら怒られると思うか、という質問に対し、経験者のB子はたぶんいい顔はされないと思うと答えた。未経験者のD子は「もし覚えたとして、ふけいっているところを目撃されたら・・・ビンタの1発くらいはされると思う。不潔な行為だと親は思っているだろうし」と答えた。一方、A子とC子は何も言われないと思うと答えた。

彩子は「みんな話してくれてありがとう。こんなこと話せたの初めてよ。本当に感謝している」と述べた。続けて「やっぱり、普通の家はそういう感じなんだろうね。羨ましい気もするわ」「じゃあ今から秘密のことを話すわよ」と言った。話を聞いた5人の顔色が少しずつ変化していった。

お姉様の話〜前篇

彩子たちの母は結婚前、腕の良い医師で、専門は泌尿器科・婦人科だった。その腕が、彩子たちにとっては、恐怖のものとなる。

彩子は静かに語り出した。「昔ね、お姉様が自慰行為をしていて、お母様に見つかってしまったことがあるの」「お姉様が小学6年生、私が4年生の時。お布団の中でショーツに手を入れているところを見つけられ、ものすごく怒られたの。その頃は二段ベッドで寝ていたから、上の段にいた私も一緒に話を聞きなさいと言われたの」「お母様によると、このような行為はとてもはしたないものであって、絶対にやってはいけないもの。あなたたちは将来結婚する相手だって制約があるのは、致し方ないことなの。自分の自由に恋愛することはできないのよ。だから性に関心持つのは早すぎるわ。こんな行為をしていると、性的に早熟になってしまうから、絶対にやってはダメだって。私はあまり理解できなかったけどね」

5人は口々に、「オナニーしたからって早熟になるなんておかしいよね」「他人に迷惑かけてないのにね」「お母様怖いね」などと喋った。彩子はその後、お姉様の受けたお仕置きについて話した。

「お母様は静かな声で、今からお仕置きをしますとお姉様に告げて、ショーツを脱ぐように命じたの。その時はお姉様も私も、お尻を叩かれるのだと思った。これまでも悪いことをした時のお仕置きはお尻叩きだったからね。そうしたらお母様が持ってきたのはお尻

叩きの棒ではなく、ピンセットだったの。お尻を付きだそうとしたお姉様を仰向けにすると、足を大きく広げさせた。そして、クリトリスの皮の中にピンセットを差し込むと、器用に先端部分を掴んだみたい。それを思いっきり引っ張られて・・・お姉様は泣いていたわ。すごく敏感なところだから痛いよね。お仕置きはすぐに終わったけど、痛みは結構残ったらしいわ。」

５人は顔をしかめた。D子は自分の股間をさすり、痛くなってきたとおさえた。彩子は「その後、お母様はお姉様と私に向かって言ったの。次、こんなことが一度でもあったら、そのときは相当覚悟しておきなさい。厳しい処置をしますって。私も怖くて涙が出てきたわ。でもね、お姉様はやめられなかったのよ・・・」

「また見つかってしまったの？」とB子は聞いた。彩子はだまって頷いた。自分でもこれ以上話すべきかどうか、戸惑ったのだ。「大丈夫よね、みんな。ここだけの話にしてくれるわよね？お姉様の一番隠したい秘密のことだから・・・」勿論というようにうなづく５人を見て、彩子は話を続けることにした。

お姉様の話〜中篇

彩子の話によると、姉はそれからも両親に隠れて時折自慰行為をしていたようだ。クリトリスをピンセットで引っ張られたあの痛みと恐怖は自慰行為への興味を消すのに十分な効果があったが、一度覚えた快感は恐怖にも勝る。できるだけカギのかかるトイレなどを選んでしようとは思っていたが、姉はトイレの中にも恐らく隠しカメラが設置されていると考えていた。その予想は当たっており、母は翌日、早速トイレに監視カメラを巧妙にとりつけていた。トイレの中で自慰行為をしたらすぐに見つかってしまっていただろう。そう考えると布団の中が一番無難だと姉は判断したようだ。しかし前回見つかった時、はいていたショーツを丹念に調べた母はシミを見つけ、これがやっていた形跡だと断定していた。それを見ていた姉は、今度はショーツをおろしてからでなければまずいと感じた。そこまではよかったのであるが、そのことが逆にあだとなり、自慰行為を見つけられてしまった。

中学生になった姉は、彩子が上にいないことを確認すると布団の中に潜り込んでゆっくりショーツをさげた。そして両手でクリトリスをさすり、うっとりとした。次の瞬間、母が部屋に入ってきたがもう間に合わない。今からショーツをあげてはわかってしまう。寝ようとしていたというしかない。しかし母の直感は鋭い。無言で布団をめくりあげる。そこにはようやく陰毛が生えてきた少女の股間があった。布団の中でショーツをさげていたのだから、やっていることは一つしかない。恐怖におののく娘に対し、母は「触ってはいけないとあれほど言ったのに、言葉とあのお仕置きだけでは理解できないみたいね。それならば仕方ない。別の方法をとりましょう。

準備ができるまでシャワーをあびてきなさい」とだけ言った。

この家の離れには簡単な医療施設まである。ちょっとした病気には専属の医師がここで対応する。元医師の母はこの部屋でお仕置きをするつもりらしい。所狭しと走り回り、準備を整えた。まだ小さい弟二人には自室で待機するように命じた後、次女の彩子と父、そして本人を呼び出した。そして実の娘に向かい、恐ろしい言葉が投げかけられた。

お姉様の話〜後篇

まだ中学生になったばかりの長女に対し、母はクリトリスの切除を宣告した。口で言ってもわからないなら体で覚えるしかないというのは母の基本的な教育方針である。とてつもなく恐ろしいことが起きるとわかった彩子は母に哀願した。

「お母様、お姉様を許してあげて下さい。もう二度としないと思います。切るのだけは許してあげて下さい。お願いします」

姉を気遣う優しい妹の哀願にも母は考えを変えなかった。母から「余計なことをいうと彩子も一緒にやりますよ」と言われては、黙らざるを得なかった。彩子は母の助手として呼ばれたのだ。そして父は押さえつけ役だ。もちろん姉は不安で涙を流していたが、母はそんな心境を気遣うこともなく、ベッドの上に腰掛けさせた。大きく足を広げ、父にもたれかかった。父はその両足を後ろから抱え上げた。これで母に向かって女性器が突き出された格好になる。母は彩子に次々道具をとらせ、手際よくクリトリス切除を開始した。まずは切れ味の良い超小型包丁を手にとり、クリトリス包皮を切りつけた。突き刺すような痛みと鮮血が噴き出す。皮の一部分を切開された クリトリスを、ピンセットで力いっぱい引っ張った。そして露出したクリトリスのなるべく根元に近い部分に照準をあてると、先程の超小型包丁を慎重にあてがい、ざっくりと肉塊を切り落とした。何とかふりほどこうとした姉だが、父の押さえつける力にはかなわなかった。

彩子はショックだった。「自慰行為とは、やったらクリトリスを

切られなければならないほどいけないことなんだ、当時は本当にそう思ったわ。クリトリスを根元から切られてお姉様は本当に痛そうだった。部屋に戻ってからも気の毒でね。何も助けてあげられなくて、それどころかお母様の助手をしていたわけだから私自身もお姉様を傷つけたように思っていた。お姉様は、悪いのは注意されてもやっていた私、彩子は何も悪くないと言ってくれたけど」

彩子の姉の身におきた、とてつもない話を聞いて、5人は皆、涙を流していた。特に自分自身が自慰行為をしているA子・B子・E子は、ショックが大きかった。ただ気持ちがよいからしているだけのことなのに、なぜそこまで抑圧されなければならないのか、全く分からなかった。

しかし彩子の家では、見つかってしまった姉だけが被害を受けたわけではない。この後、彩子も弟たち2人も、自慰行為を予防するために母が処置を行った。事前に防止策をとらなければならないほど、母にとっては忌むべき行為だったのだ。